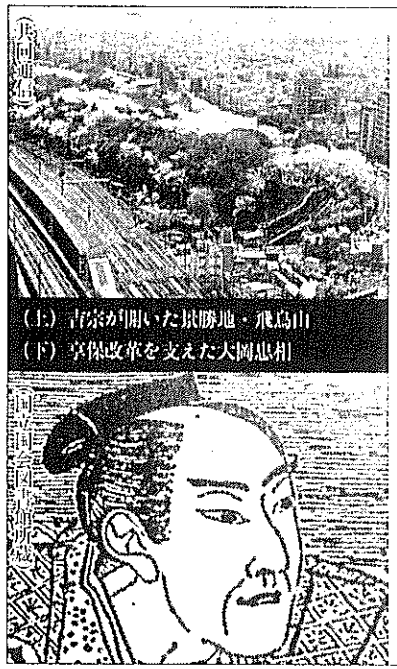
将軍の世紀

〔第二十七回〕享保改革と天一坊と庶民

享保改革を成し遂げた吉宗は、軍人政治家の曾祖父・家康から何を学んだのか。

山内昌之（やまうちまさゆき）
武蔵野大学特任教授・東京大学名誉教授


（上）吉宗が隠いた狩勝地・飛鳥山
（下）享保改革を支えた大岡忠相

平成二十七年（二〇一五）五月の歌舞伎座四菊祭昼公演では「天一坊大岡政談」がかかり、夜は「慶安太平記丸橋忠弥」が上演された。さながら随筆家・神沢杜口が『翁草』（巻百五十）で天一事件を由比正雪の変と並べた妙を思い出した。社会不安の一因たる牢人問題が絡む河竹黙阿弥の名作二品が平成の時代に同日公演されたのは興趣であるが、芝居の天一坊と違い実在の天一は陰謀家・正雪よりも小悪党・直侍に近い。八代将軍・吉宗の治世も半ばを迎えた頃、深川に改行なる山伏がいた。日々酒に狂うあまり、紀州生まれの母よしの手元にあった、「半之助」なる貴人の書付をいつも曰くありげに自慢した。母は日頃から口癖のように「吉」の字大切にと諭したというのだ。吉宗の幼名は「新之助」であり、「吉」の字を大事にという教えは、改行が徳川の本姓を冒して天下一に通じる源氏坊天一を名乗ると座興で済まなくなる。酒乱酒狂の天一が、高貴な由緒自慢をあたり構わず語ると、師匠の堯仙院（深川万年町）も空恐ろしくなり寺社奉行に届ける他なかった。貴種の落胤伝説は、今も昔も庶民の喜ぶ話題である。吉宗を清廉と勝手に思い込んでいた庶民は、やがて河竹黙阿弥の『天一坊

大岡政談』や実録の『天一坊実記』を通して、将軍も並の男だと勝手に人間味を喝采したのだ。

吉宗の御落胤事件の主要史料は『南紀徳川史』（第一冊・巻之八）の「享保十四年酉四月廿五日御沙汰書」と京都人・本島知辰の『月堂見聞集』の記事である。前者によると届を受けたのは寺社奉行であり、天一が吉宗の御胤であれば落度は許されない。「酒狂の儀」として他に預けよと堯仙院に命じ堯仙院は身柄を孫弟子の南品川・常楽院に押し付けた。そこでも天一は紀州生まれを誇示し、性懲りなく「吉の字大切」を繰り返し、将軍家の「御扶持」頂戴の時に行列を固める牢人を集めた。酒に酔うと「かれこれ悪口を申し騒ぎ候」だけでなく、「吉の字大切」を始めるものだから、もはや幕府としても放置できない。享保十四年（一七二九）四月二十五日に死罪獄門の沙汰が下った。改行の名乗りは、『月堂見聞集』（巻二十一）によれば、私が参照した『近世風俗見聞集』所収本では「世良田松平源氏坊天知天一」とあるが、辻達也氏の依拠した異本では「徳川源氏坊天一吉種」と大胆にも徳川姓と吉宗の偏諱が使われている。家康の祖父・清康は世良田次郎三郎と称したこともあった。

『南紀徳川史』によれば天一は公儀の「筋目」と僭称し、享保十二年（一七二七）八月三日に江戸城吹上で将軍に独礼の格で御目見をし、盃を頂戴したと法螺を吹く。それから常楽院の預りまで、五百俵三十人扶持を宛がわれたというのも虚言である。遊女町で酒に酔い暴れたので院から追放されたが、上野御門跡から召し出され、享保十三年六月九日に改行は上野に参詣したので、常楽院は「路銭」を少しくれてやった。老中たちに会うという話も捏造か妄想のはずだ。十二日まで帰らなければ、上野の門で札を差出し迎えに来てほしいと頼むなど芸も細かい。そこで天一自筆の松平源氏坊宿南品川常楽院なる札を提出した次第だと常楽院は説明する。追って召し出しの約束や、上野で「役者」（寺役人）から銀十枚を借りて香典に供した自慢も偽りだと常楽院は踏んだ。真実があるとすれば、常楽院をやがて取りたて、雇牢人たちも役付にすると天一が口約束をしたことだけだ。赤川大膳と改名させられたのも口惜しいと嘆く常楽院は、とても舞台の山内伊賀亮ほどの大芝居を打つ奸智も度胸も見られない。こうして、獄門一人、遠島四人、家財取上げ所払二人、江戸払十三人、過料五貫文一人、戸〆（戸に釘を打ち外出禁止）七十日一人、名主役取上一人、御構無し一人、そして密告した牢人一人に銀五枚の褒美が下されて事件は終わった（「享保十四年酉四月廿五日御沙汰書」。『月堂見聞集』巻二十一。『享保通鑑』巻十六）。

文藝春秋

芥川賞発表 受賞作全文掲載
古川真人「背高泡立草」

特集 医療を歪める「ニセ科学」本庶佑ほか/石破茂「安倍総理よ」 三月特別